

# 皇位繼承の歴史（三） 「承久の變」

高田 友

一二一九年、三代將軍實朝鎌倉鶴ヶ丘八幡宮社頭にて、甥公曉の爲に殺害せらる。なほ公曉は源爲朝の曾孫なり（訝りたまふなかれ）。於是、京の朝廷にては、後鳥羽院、幕府の大政を奉還するあらんと期する所甚だしきあり。豈圖らんや、執權北條義時、却つて後鳥羽院皇子雅成親王（六條宮）の關東下向、將軍就任を奏請す。院、これを拒絶あらせらるるや、義時、攝關家の若君に白羽の矢を立て、藤原道家の息いまだ二歳なる三寅を將軍に迎ふ。院は敢へて異を立てたまふなかりしとの由。

實朝の歌に曰く、「山は裂け海は褪せなむ世なりとも君に二心我あらめやも」と。心底皇室尊崇の念篤かりき。院はこれを待みて、皇室の式微を恢弘せんと庶幾ひ給ひてありしに、實朝亡き後、北條氏の關東に君臨せんとする様を御覽して、「主上御謀叛」の叡慮を固めさせたまふ。

三寅は實朝薨去の半年後に鎌倉に至る。然るに後鳥羽院は、その數日後に在京御家人・大内守護源頼茂（源三位頼政孫）を誅殺せさせたまふ（一二一九年八月）。名は將軍位を覬覦したるがゆゑとの由なれど、其實は擧兵の聖旨洩れたるがゆゑとぞ推測せらるる。

幕府は暗雲漂ふを察知したれども、流石に憚りありとて未だ拱手傍觀するに留まる。而して、一二二一年初頭に至るまで一年半、京と鎌倉の交渉、殆ど途絶す。

これより二十三年の昔、一一九八年、後鳥羽院は十九歳にて、三歳の爲仁親王に讓位して、治天の君とならせたまふ。爲仁はすなはち土御門天皇なり。然れども、院は爲仁の一歳下の弟宮守成親王を鍾愛せられ、一二一〇年、十五歳の土御門帝を退位せしめて、守成を登極せしめたまふ。これ順徳天皇なり。

一二二一年を迎へ、後鳥羽院は、順徳第四皇子懷成親王を踐祚せしめて仲恭天皇としたまふ。ときに四歳。九條良經の外孫にして、三寅の同年の従弟たり。

五月、院は京都守護・伊賀光季を誅殺して、親幕の西園寺公經を幽閉し、義時追討の院宣を渙發あらせたまふ。一方、光季誅殺の報は僅か四日にて鎌倉に達す。

驚くなかれ、院の檄を受けたる在京の御家人は、大半が院に隨ひたり。これによりて、院は我が事なれりと安堵したまひけれど、糠悅びにぞ畢んぬる。

鎌倉にては、御謀叛の報達したるときは、義時また蒼惶として爲す術を知らざれども、義時の姉・二位の尼・政子の名高き演説の效ありて、鎌倉の御家人は擧つて義時に忠誠を誓ふ。

扱、侃々諤々の僉議行はれ、箱根・足柄の關を守りて防戦せんと言ふ者多かりしかど、初代政所別當にして古希を過ぎたる大江廣元、京都へ進軍せんことを唱へて、つひに評議これに一決せり。

先遣隊として、義時の子泰時、僅々十八騎を率ゐて出立す。一時も經ずして、還り來り、義時に問うて曰く、「主上御自ら兵を率ゐて攻め來りたまはんには、これに弓引くは冥見に就て其の恐れ無之候耶」と。義時答へて曰く、「主上御自ら御出馬有之候ひけるときは、弓切り折りて降參せずんばあらざるべし」と。すなはち増鏡の傳ふる所にして、盡忠の志、爾來八百年に亙りて皇國の美談となりたりけれども、豈眉に唾して聴かざるべけんや。

やがて泰時を追つて西上する兵、十九萬に垂々とす。官軍は木曾川の大井戸にて迎へ討たんとすれど、たちまちに突破せられ、さらに、瀬田・宇治の戦ひも朝敵の勝利に終る。

而して、幕軍都に雪崩入りて制壓す。

茲に三浦胤義あり。御家人なれど京に派せられて檢非違使判官の任にあり。攝家將軍を迎ふべく建議したる三浦義村の末弟なり。院の御誘おんいざなひに應へて官軍に屬す。而して兄に密書を送りて、官軍に加はらんことを請ひたれど、兄は密書を義時に齎して、幕軍に著く。

胤義の妻は二代將軍頼家の愛妾なりき。すなはち頼家を殺害したる北條氏を恨むるの段一方ならず、胤義は情に引かるるの餘りにかくはなしたりと傳へらる。

胤義武勇の人、敗軍の將となりてなほ奮戦、院の御所に落ち行き、主上を擁して一矢を報いんとす。然れども、院は門を固く閉して胤義を拒み、曰のたまはく、「いづこへなりと落ちて行け」と。胤義の配下の一人は「大臆病の君に騙られたわ」とて、門外より散々に院を罵り奉る。一同不得やむをえず已して立ち退き、東寺にて末期の一戦に及び、つひに自害す。

而して院、幕府に申し開きして仰せあるは、「こたびの擧兵は我が關與する所にあらず」とて、義時追討の院宣を撤回あらせられ、剩へ、胤義追討の院宣を發せらる。また、「自今、朝廷は幕府の指圖に違背することなかるべし」と誓言せらる。已哉。

然りといへども、北條氏はもはや躊躇ふことなく、皇家に鐵槌を下し奉る。後鳥羽院は隱岐、順徳院は佐渡へ遷幸あらせらる。土御門院は父院（後鳥羽）に疎まれ奉れるがゆゑに謀議に加はらず、幕府も咎め奉らんと所存はなかりしかども、御自ら「父と弟の流さるるに何爲我一人都に留まるべけんや」と罪せられんことを請ひたまふ。幕府宥め奉らんとすれど、重ねて強請ありしかば、畢竟土佐へ遷し奉るの外なかりき。後に罪あらせられざるを輕んじて、都に近き阿波へ遷幸の儀を願ひ奉り、この地に崩じたまふ。

後鳥羽院は隱岐の行在所に二十八年御逗留あらせらる。

朝廷にては末路の不幸なりし帝には、諡號に「徳」の字を附くるを慣例とす。孝徳・稱徳・崇徳・安徳、みな然り。順徳もこれに倣ふ。崇りを恐れたるなり。然るに、後鳥羽院は崩御に際して、御自ら「朕は崇りを爲すことあらじ。諡號に『徳』の字を用ゐるに及ばず」と御遺言せられたり。これによりて、「隱岐院」と申し上ぐるも、京鎌倉にては、なほ崇りを恐れ、ややあつて「徳」を入れたる「顯徳院」なる諡号を奉れり。

然而、院は崇りを發せられたり。京に鎌倉に不幸相繼ぎ、延ては傍系より入り給ひたる二代目の四條天皇、史上例なき主上の事故死にて崩じたまへり。すなはち、遺命に背いて諡號に「徳」の字を奉れるがゆゑなりとて、これを改めて、「後鳥羽」と申し上ぐるに至る。

幼兒なりし仲恭天皇は廢せられ、新帝の選定あり。後鳥羽院には御孫數多おはしませど、幕府は院の御子孫は皇統より排除すべしとの意固こころく、悉く配流・出家・臣籍降下の處分に付す。今や、皇室に残りたる在俗の男子は茂仁王ゆたむと御一方のみ。而して、茂仁王の父は行助法親王（守貞親王／幼時壇ノ浦より生還したまひたる皇子なり）、後鳥羽院の異母兄にして、安徳帝の異母弟にておはします。かくて、幕府は茂仁王を皇位に即け、法親王を治天の君と爲し、院政を敷かせ奉る。崩御の後は後高倉院とぞ申し上ぐる。

茂仁は後堀河天皇となり、その皇子四條天皇も登極したまひけれど、前述の如く、後鳥羽院の崇りにて早世したまふ。

「後高倉院」および後の世の「後深草院」に限りては、「後」の字を「こ」にあらで「のち」と讀む

べし。何となれば、「後高倉院」は皇位に即きたまひしにあらざれば、歴代と峻別して「ご」を避く。また、「後深草院」は「後」を「ご」と讀めば「ごふかくさ」、更にウ音便ありて「ごふかうさ」、「御不孝者」と同音。就中、後深草院は御父後嵯峨院と確執あらせたまへば、格別に配慮あるべしとて、「のち」とこそは讀み奉れるなれ。

(平成三十年六月十二日受附)